

# 社会科教職課程受講生の意識と学修成果

小 山 幸 伸

## 1. はじめに

本稿は、敬愛大学における社会科系教職科目である日本史概論の受講生を対象としたアンケート調査ならびにその後の授業での成績評価ポイントに基づき、受講生の社会科教育に関する意識と行動を調査し、そこから日本史概論における教育法の課題を検討しようとするものである。かかる研究手法は、戸田靖久氏が大阪産業大学において意識調査を実施され、その調査結果から、社会科教育や教員に対する教職課程受講生の意識の特徴と、そこから想定される教科教育法の課題について考察を行われている<sup>1)</sup>。戸田氏の研究手法に感銘を受けた筆者は、筆者が勤務する敬愛大学においても同様の調査を行い、受講生の意識を調査し、そこから社会科教育とりわけ歴史教育を担当する日本史概論についての授業改善の一助としたいと考えた。さらに、受講生の社会科に対する意識は、彼らの学習行動にどのように反映されるものなのかを学修成果を調査することから検証することで、戸田氏の研究をより発展的に継承したいと考えた次第である。

そこで受講生に下記の質問を行い、その回答から、受講生の社会科に対する意識や、社会科教職課程に対する理解度の実態把握を試みた。そこでは、受講生の回答を紹介するとともに、そこから読み取れる受講生の学習指導要領に対する理解が、どの程度あるのかを考察することとした。

この調査は、2018年度後期にも一度行ったが、回答した者が5名と少なく、有効な調査になっていなかったため、2019年度前期に改めて調査を実施した。アンケート調査は無記名で行い、研究にのみ利用すること、利用

することを了承した者のみ提出することを確認した上で実施した。実施の要項は以下の通りである。

○実施日：2019年4月10日（水）にアンケートを配付

4月17日（水）ないしは4月24日（水）に提出

○対象講義：日本史概論Ⅰ

（履修者19名：1年生3名、2年生8名、3年生7名、4年生1名）

○回答数：16名（氏名は記入せず、学部・学年の記述は自由）

○設問：8項目（すべて自由記述）

Q1. そもそもあなたが教職をめざした動機は何ですか。

Q2. あなたが社会科系教科（中学社会科・高校地理歴史科・高校公民科）の教員免許を取得したいと思う理由は何ですか。

Q3. あなたにとって理想的な社会科の授業とはどのような授業ですか。

Q4. 社会科系の授業とは、生徒に何を伝えるものだと思いますか。

Q5. 社会科系の教員に最も必要な能力や技能は何だと思いますか。

Q6. 社会科系の教員になるためにどんな準備をするべきだと思いますか。

Q7. あなたが中学・高校で受けた社会科系の授業は役に立っていますか。役に立ったという人はその理由を、役に立っていないという人もその理由を書いて下さい。

Q8. 2022年度の新入生から実施される高校の学習指導要領では、18世紀以降の世界と日本の動向を関連付けて学ぶ「歴史総合」を必修科目として新設することが盛り込まれているが、これについての意見を聞かせてください。

上記の設問項目から、受講生の社会科教育の経験と、それを通して社会

科教育をどのように認識しているのか、また今後の社会科教育についてどのように取り組もうとしているのかを把握することを目的としている。

次に、その意識を踏まえて、彼らが「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」<sup>2)</sup>という社会科、地理歴史科、公民科における教育目標である「公民としての資質・能力」を育成するための柱となるものを身に付ける行動を行ったのかを検証した。授業における予習・復習などでの課題への取り組みを通じて、上記の目標を自身が達成する行動を取っているのかを確認することから、彼らの社会科教育や社会科教員に対する意識と、彼ら自身の学習行動との間に乖離があるのか、あるいは学習指導要領の教育目標との間に乖離があるのかを確認した。

以上の調査から、社会科教職課程受講生に対する理解を深め、社会科教育の授業改善について考えたい。

## 2. アンケート調査から見た受講生の意識

本節では、アンケート項目ごとに、その自由記述の回答を列挙し、そこから見て取れる受講生の意識を確認したい<sup>3)</sup>。なお、回答番号は特定の受講生と対応しないように配慮した。

敬愛大学は、経済学部（経済学科・経営学科）と国際学部（国際学科・こども教育学科）によって構成されており、いわゆる教員養成系大学ではない。しかし、教職課程については、系列の千葉敬愛短期大学において小学校教員の養成を行って来た伝統や、経済学部でも教職課程を50年間実施して来た伝統がある。さらに国際学部にもこども教育学科が設立されていることもあり、毎年一定数の学生が教職を希望して入学して来る傾向がある。そのうち、こども教育学科の学生の多くは小学校教員を希望しているが、その中には社会科を副免許教科として履修している者も若干いる。

そのようななかで、社会科の教員をめざす学生は、そもそもなぜ教職を

めざそうとしたのであろうか。まずそこからアンケートを開始した。

Q1. そもそもあなたが教職をめざした動機は何ですか。

- ①高校時代に受けた歴史の授業が面白くて、自分もあんな風になりたいと思い教師を目指そうと思った。
- ②中3の頃からの夢でした。中学校時代の担任が好きで教師になろうと思いました。
- ③中学・高校ととても良い先生に会えて色々と教わったので、自分も教員になって同じように教えたいと思ったから。
- ④中学・高校と社会科の先生にお世話になり、社会科の授業を通して生きていく力を身に付けさせてもらったから。
- ⑤中学校の社会科の先生が苦手だった分野を楽しく分かりやすく教えて下さり、憧れがきっかけで好きな分野を調べるうちに教えてみたいと感じたからです。
- ⑥中学生の時の理科の先生が、「学ぶことの楽しさを伝えたい」と言っており、その先生のお蔭で授業が楽しく好きになったことから、元々好きだった社会科目で同じことを伝えたいと思ったため。
- ⑦中学校で出会った先生に、勉強だけでなく、心も教育していただきました。中学校で学んだことは今でも活かされています。私もそんな先生になりたいと思い教職をめざしました。
- ⑧動機は、小学校の時の担任の先生との出会いです。仮説実験授業をする先生で、生徒が進める授業を第一に考える先生でした。また今というアクティブラーニングであり、生徒間での話し合いを多くしていました。生徒全員が参加して話し合う授業は私の理想です。またクラスの問題のことも同様のことを行い、厳しさの中には子どもへの愛情のつまった先生でした。

- ⑨自分は中・高と先生に迷惑をかけるタイプの生徒でした。その時、先生が自分を変えてくれたので、そんな先生になりたいと思ったからです。
- ⑩父母が小学校教諭であったのと、中学の担任と高校の日本史の先生に憧れたため。
- ⑪私が教職を目指した動機は、中学校でバスケットボールの指導がしたいと思ったからです。理由としては、私が今までバスケットボールを部活動で行ってきた際に、中学の時の成績が満足できるものではなく、私自身が考え行動してきました。顧問の先生は、人間性はさて置き、バスケットの指導は良いものとは言えませんでした。チームもなかなか上の方には行けず納得できませんでした。それでも私は強豪高校へ進み、そこで全国でも有名な先生に指導して頂きました。その時の先生のように私もバスケットを教えて行きたいと思うようになりました。高校で世界が変わったと思いました。そのような経験をするためには、中学校の下積みが大切だと思ったのが動機です。
- ⑫高校生活が楽しくて、周りの生徒達のような生徒を持ちたいと思ったから。もともと高校生活が大嫌いだった自分が好きになれたように、生徒達に学校を好きになってほしい、そして夢や仕事、趣味、生涯をかけてやりたいことを見つけられるきっかけになれる存在になりたいと思っている。生徒達と高校生活を送り続けたいと思っている。
- ⑬小学生あたりから漠然と教員になりたいと考えていたが、日本史に興味を持ち、本格的に教員を目指し始めた。
- ⑭こどもが好きで成長過程を見てみたいと思ったから。
- ⑮緑の少年団やボーイスカウトに指導者として所属しており、そのなかで小・中学生と交流していくことで職業としても、この経験を重

ねていきたいと思ったからです。

⑯公務員試験に落ちたため、教師になりたいと思ったため。

このQ1に対する回答から、まず見えてくるのは、予想通りとでもいうべきだが、これまでの学校生活における教師との出会いである。回答①はその典型であろう。良い教師との出会いが、次世代の教師を形成するのである。①～⑩は、教師による良い指導を通して教職をめざしたことが確認できるものである。いっぽう⑪は、その逆で自分の体験のなかで、教師の指導に満足できないものがあり、それを克服することが教師をめざした理由であった。良いにしろ悪いにしろ、学校での教師の指導が重要な要因となっていることが理解できる。

それに対して、⑫～⑯は教師以外の要因を出発点として、教職をめざそうとしている回答である。そのなかでも⑫は学校経験に基づいているものであり、学校教育が影響を与えているものとして分類できる。したがってそれ以外の4例（25%）が、自らの興味関心や、児童・生徒に対する関心、あるいは進路変更ということになる。数年前には、野球部員の学生が受講する割合が高く、部活の指導者になりたいために教職課程を履修したという者が多かった。自らの部活経験に基づき部活動指導者になりたいと考えることも、自らの教育経験に基づくものと位置づけられるものである。戸田氏の調査では一定割合で、そのような回答が見られたようであるが<sup>4)</sup>、敬愛大学における2019年度の受講生にはそのような回答が1例しか見られなかった。

ここからも分かるように、教師の指導が生徒の進路決定に影響を与えるのである。その際に、教員が指導した教科が好きになり、その教科の教員をめざそうとしたことが予想される。既にそのような傾向は、Q1の回答のなかにも①④⑤⑩などから確認できる。

そこで、次の質問を行った。

Q2. あなたが社会科系教科（中学社会科・高校地理歴史科・高校公民科）の教員免許を取得したいと思う理由は何ですか。

- ①今まで教わった社会の先生がとても面白くタメになったので、自分もなりたと思った。
- ②高校の時に会った社会の先生のようになりたかったから。
- ③私は得意な教科が国語だったので、初めは国語の先生になろうとしていましたが、あえて一番苦手な地理・歴史の先生になって、社会科を不得意とする生徒に苦手だったからこそ、得意になるような授業が出来るのではないかと思ったのと、私の尊敬する高校の恩師が社会科の先生だったので、社会科教師の免許を取得しようと思いました。
- ④大河ドラマ『天地人』を見て直江兼続が好きになり、中学校で苦手な地理をわかりやすく教えてもらい、教えてみたいと考えたため。
- ⑤自分自身の得意科目が社会科系で、それを生徒に教えたいと思ったからです。
- ⑥一番大きな理由は、自らが社会科系教科が好きだからです。仕事でも好きな勉強をしたいです。
- ⑦元々社会が好きであり、そこから教職を目指そうとなった時に、やはり教えたいのは自分が好きである社会でないと楽しく教えられないと思ったから。
- ⑧歴史が好きだから。
- ⑨日本史などの歴史科目が好きなため。歴史の因果関係が分かった時の喜びを教えていきたいため。
- ⑩5教科の内、社会が平均的に出来ていたから。地理が好きだから。
- ⑪高校生の時にミッションという授業があり、和紙作りをした。その時、和紙を歴史的に学びながら、団扇やティッシュ箱・ランプシェー

ドなどを和紙で現代風なものにリメイクして作ったことで、過去と現代の繋がりやの架け橋になったようで嬉しかったから。生徒達にも現代と過去を比較しながら、どうして今の世界や日本があるのか知り感じてほしいから。

⑫社会科目は暗記科目になることが多いと思います。それで終わるのではなく、時代の背景やその地域にあるヒントから未来を作れると思ったからです。歴史は覚えるだけでなく時系列が大切であったり、地理は旅行先での地形であったり、生活に生かせることが多い教科であり、それを気づかせることができると思ったからです。

⑬過去に行った事を伝え、そこから未来につなげてほしいから。

⑭地理や歴史、公民の知識を増やすことは社会に出て生きていく力に繋がると考えていて、生徒達にそういった力を身につけてほしいから。

⑮社会科の授業をただの暗記科目としてだけでなく、一つ一つの出来事にもちゃんと意味とつながりがあることを教えたいと思ったから。

⑯生徒達が、歴史や地理・公民を勉強していて、自分自身の可能性や将来に希望を持ってもらえるような教育がしたいと思ったからです。よく歴史を勉強していると「過去には戻れない」などと言った言葉を生徒は言いがちですが、私はそこで過去から物事を学び、成功や失敗を学び、深い考え方ができるような教育をしたいと思います。社会科を勉強するということは、自分自身の人間性を磨くということにも繋がるのではないかと私は思い、社会科系教科の教員免許を取得したいと思いました。

この質問からも、Q1と同じように教師の影響が確認できる。回答①～④がそれに相当する。①が典型例であると思われるが、その指導が好きで、その教科を自分も指導してみたいと考える学生は多いと思われる。また④



のように苦手教科を丁寧に指導してもらったことを契機として苦手意識を克服したことで、その教科の指導者をめざすこともある。ここからも、やはり教師の指導が強い影響を与えていることが確認できる。また、そもそも地理や日本史などの社会科系科目が得意であるとか好きであるという理由も想定される。⑤～⑩はそれに相当するものであろう。④のように大河ドラマを契機に歴史上の人物に興味を持ち、そこから歴史が好きになるということもあるだろう。⑥の回答に見られるように、自身が得意であるとか好きであるという分野を仕事として選択したいということも進路選択として十分に成り立つものである。

いっぽう興味深いのは⑪～⑬の回答に見られるように、社会科の教科としての本質に根差した回答が見られることである。歴史が「暗記科目ではない」とか、「過去と現代を繋ぐ」科目であるという理解に基づく回答や、あるいは社会科が「社会に出て生きていく力に繋がる」教科であること、社会科の学習を通して自らの人間性を磨くという回答には、社会科を学ぶ意義を踏まえて社会科の教職課程を選択している様子が確認できる。これらのフレーズが教師からの「受け売り」という可能性は勿論ある。このような理解に至った背景についても知りたいところである。まず考えられるのは、教科指導法の授業などの影響であろう。教科指導法を学習する過程において、中央教育審議会答申を踏まえた平成29年告示の中学校学習指導要領あるいは平成30年告示の高等学校学習指導要領に対する知識を得たことからの回答とも考えられる<sup>5)</sup>。答申において述べられているように、「社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたり」することが社会的事象の「歴史的な見方・考え方」として示されている<sup>6)</sup>。この点に関する理解を踏まえ、回答⑫の「時代の背景やその地域にあるヒントから未来を作れると思った」や、回答⑮の「ただの暗記科目としてだけでなく、一つ一つの出来事にもちゃんと意味とつながりがあることを教えたい」に繋がった可能

性はある。また、回答⑭の「地理や歴史、公民の知識を増やすことは社会に出て生きていく力に繋がると考えて」や、回答⑯の「社会科を勉強することは、自分自身の人間性を磨くということにも繋がる」というのも、平成29年告示の社会科および平成30年告示の地理歴史科の改訂において、育成すべき資質・能力として挙げられている3つの柱に対する理解を踏まえているとも考えられる。平成28年12月の中央教育審議会答申において、「何を理解しているか、何ができるか」、「理解していること・できることをどう使うか」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の3つの柱に整理して、「生きる力」をより具体化した提言がなされ、それを踏まえた改訂において、全ての教科等の目標や内容を「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に整理している<sup>7)</sup>。回答⑯は、3つの柱の1つである「学びに向かう力、人間性等」の涵養を踏まえた回答とも考えられる。いっぽう回答⑭「社会に出て生きていく力」は、教育基本法第2条（教育の目標）三の「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」や、それを踏まえた学校教育法第21条（義務教育の目標）に基づき、中学校社会科学習あるいは地理歴史科学習の究極の目標として「主体的に社会の形成に参加」することであることを理解した上での回答と考えられるだろう。

また中学校や高校での授業においても、折りに触れて教師がその科目の意義を説明していたことが、その理解を形成した可能性もあるだろう。特に注目したいのは回答⑪である。和紙作りという具体的な授業体験から、歴史を学ぶ意義を理解したプロセスが見て取れる。このような教育基本法第2条五の「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」ことや、学校教育法第21条三「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養う」ことを踏まえた教育を経験したことが、

社会科教員をめざす機会となったことを示している。

したがって教師からの「受け売り」ばかりではないと判断される。このような教育経験を踏まえて、歴史あるいは社会科の教科としての意義を理解し、自らの進路選択の要因となったとしたら、それは非常に意義深いことである。仮に教師が教条的に同じフレーズを繰り返したことで、生徒が「受け売り」で理解を形成したとしても、それを一概に否定できるものではない。まして具体的な授業での教育経験を通して生徒の気づきを導く授業展開が行われ、それが生徒の理解を形成したというのなら、それは貴重な教育機会と評価しうるものである。筆者もそのような授業を重視する<sup>8)</sup>。では、受講生はどのような授業を理想と考えているのだろうか。

Q3. あなたにとって理想的な社会科の授業とはどのような授業ですか。

- ①豊富な知識を持つ教師がする授業。因果関係を結びつけ、それを正確に解説できる授業。
- ②教科書に載っていることだけでなく、豆知識などを入れて覚えやすくなっている授業。
- ③写真や絵・地図などから、たくさんの情報を与えられるような授業。
- ④ずっと先生が話し、黒板を写すだけの授業はおもしろくなかったので、写真などの資料を見せたり、生徒の考えを聞いてみたりして行きたい。
- ⑤流れをつかむことができる授業。ただ文章を読み資料を見るだけの授業ではなく、一つの事柄に対して、なぜこれが起きたのか、起きた後の結果は？など、起承転結のように流れを教えることができるような授業。
- ⑥ただ歴史の流れを教科書に沿って教えるのではなく、そこからさらに内容をふくらませた授業を行うこと。こちらから一方的に教える

- のではなく、生徒から自主的に意見を出してもらえるような授業。
- ⑦先生が一方的ではなく、アクティブラーニングを用い話し合いの時間を作る。
- ⑧常に一方的ではなく双方向から意見や考えが飛ぶ授業が理想的だと考えます。
- ⑨社会科の授業を通して、生徒達にワクワク感を与えたり、いろいろな事に興味を持っていただけるような授業だと思います。歴史では、過去と今を比べて文化を知り、施設や、文化財などに興味を持ってもらったり、地理では、外国に行ってみたいと思う事や、地形や気温・人種の違いを学びたいと思ってくれるような魅力を伝え、楽しいと思えるような授業をすることだと私は思います。ただこちらから一方的に教科書の内容を伝えるだけでは得られるものは少ないし、忘れてしまいがちなので、生徒達自身が積極的に伝える授業、アクティブラーニングのような授業ができる事が理想だと考えます。
- ⑩眠くならず、授業内容以外のより詳しいことを自分で調べ学習したいと思える授業。
- ⑪遊びを取り入れて楽しく、そして自ら学習できるような授業。
- ⑫中学時に、歴史人物カルタをやっていたのですが、楽しく覚えることができる授業にしたいです。板書だけで終わるのではなく、言葉のキャッチボールを大切にしたい。生徒が授業を進めて行き、先生が助けることで成り立つようにしたいです。
- ⑬事実論だけを伝えずに、どれだけ生徒達に想像力を働かせ、生徒達が板書や印刷しているもの覚えるという感覚ではなく、「あの授業は楽しかった」と言わせること。授業でやった内容ではなく、授業内容・流れから生徒達の印象が残る授業。
- ⑭面白いと思ってもらえる授業。
- ⑮教科の知識を教えるだけでなく、今後社会に出たときに役立つこと

を教えられる授業。

⑯生徒が現代の社会に繋げて考えられるようになったり、自分から興味を持ち、しらべたりするような授業。

まず、想定されうることであるが、社会科という教科の特性から知識の豊富さを意識した回答が多かった。「歴史は暗記科目ではない」と言われるように、知識に偏重した授業に対する批判はあるものの、教師に豊かな知識が求められるのは当然のことであり、回答①に見られるように、授業において、その豊かな知識を反映させ、正確に伝達することを理想と考える受講生がいるのは当然のことである。回答②のように、授業展開のなかで関連する知識を伝達する授業を通して、「知る喜び」を与えることを理想と考えている受講生もいた。このような知識の伝達において、図版などの資料を用いる授業を理想とする回答③・④も同様のカテゴリーに分類されるものであろう。また歴史の授業としては「流れ」を重視するべきであると考えているのが回答⑤である。これらの回答からは、授業に対する基礎的・基本的理解として、先述した学習指導要領において育成すべき資質・能力として挙げられている3つの柱のうちの「知識・技能」を尊重する姿勢が読み取れる。その中には回答③のように「写真や絵・地図などから、たくさんの情報を与えられるような授業」というように、教師が資料を提示することで多くの情報を提供することや、回答⑤のように、ただ資料を提示するだけではなく資料から因果関係を読み取らせようとしているものもある。これは「諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」<sup>9)</sup>という歴史的分野の目標に近づくものではあるが、教師主体で展開する授業を想定した回答であり、資料に基づいて学習する技能を修得させることで、生徒の主体的な学びに繋がる点については言及できていない。

これに対して、教師が一方的に知識を伝達するのではなく、双方向的な

授業、生徒主体の授業を理想とする回答が⑥から⑬である。回答⑥の「生徒から自主的に意見を出してもらえるような授業」とか、回答⑦の「話し合いの時間を作る」、回答⑧「双方向から意見や考えが飛ぶ（飛び交う）授業」を理想としていることや、回答⑩の「自分で調べ学習したいと思える授業」や回答⑪の「自ら学習できるような授業」というように、「主体的・対話的で深い学び」<sup>10)</sup>の実現へと導きたいと考えている様子が確認できる。

このような思考が見られる背景には、教職課程履修者の多くが教科指導法や他の教職専門科目などを通して、指導法について学習し、このような考え方を確立したことがあるのではないかと推察する。教職課程を履修する受講生は、学年進行とともに、授業理解が深化するものである。その結果、アクティブラーニングという教育手法を理想とする回答が多くみられるようになったと想定されうる。回答⑫はその典型である。具体的手法としては、自らの教育経験から、生徒同士の話し合いや、歴史人物カルタなどの「遊び」を通した歴史授業というものを想定しているようである。そのようなことを通して、「楽しい」とか「面白い」と感じる授業を理想としているのだろう。回答⑭は漠然とした回答であり、何を以って「面白い」授業と考えているのかという筆者が知りたかった情報が得られなかった。この「面白い」には、教師の話術が「面白い」と感じさせる授業展開もあれば、アクティブラーニングなどにより「授業に参加した」という実感がもたらす「楽しさ」や「面白さ」もある。いずれにしても生徒満足度を上げることが重要であると認識していることは確認できた。また生徒参加の授業を意識していることが読み取れるが、そこには「意見」を述べたり、「遊び」を通して活用したりすることが記されている。生徒が獲得した「知識」を、ただ「知っている」とか「理解している」というレベルに止めるのではなく、「使う」ことを意識した指導の萌芽とも考えられる。

最後の回答⑮・⑯は、社会科の教科内容を踏まえた回答である。社会に

出た時に直接的に必要とされる知識を伝達することも社会科に求められる特性であり、そのような教科の性格が反映された回答である。また、調べるという技能を修得することも社会科に求められるものである。授業を通してそれらを学ばせることで、将来に繋げようとしているのであろう。前述した社会科・地理歴史科学習の究極の目標である「主体的に社会の形成に参加」することに合致する回答と考えられる。

このように社会科において理想的な授業として、受講生の多くはアクティブラーニングの手法を理想としており、またその授業内容においては知識を伝授することと、現代社会との繋がりを意識して、社会で必要な知識や技能を修得させることなどを理想としている様子が伺えた。さらに、生徒が獲得した知識を使用できるように育成していく指導への萌芽も読み取れた。この点を育成することは、今後の教職課程における授業での課題である。

では、そもそも社会科系の授業とは何を伝えるものであり、何の役に立つのか、そのために教師はどのような能力が求められ、どのような準備が必要なのか。既にそのようなことが垣間見える回答もあったが、以下、その点に関する項目の回答から、受講生の意識を確認していきたい。

Q4. 社会科系の授業とは、生徒に何を伝えるものだと思いますか。

- ①世界の地理や気候、歴史を伝えるもの。
- ②歴史。理由は何の分野でも歴史すなわち昔あった事などを教えているから。生き方。小学校では生活科など生きる上で大切なことを学ぶ。
- ③社会の事実を伝えるものだと思う。まとめてそうと言える自信はないが、歴史や地理では今までに起きたことが、世界の気候や地誌、明らかになっている事実を伝えるもの。公民に対しては憲法や法律

があてはまる。あてはまらないものもあるが、ほとんどは今までにあった事実を伝える授業だと思う。

- ④日本の成り立ち。過去から学び、くりかえして良い歴史と悪い歴史を考える。日本の社会構造など。
- ⑤大まかに言うと、地球で起きている事象を伝えるものだと思います。そのなかの一部として、日本のことや外国のことを様々な視点から見て知識を伝えます。歴史では過去から現在へと繋がっているのか、地理では人種の違いや文化の違いを知り、テレビや新聞などで取り上げられていることと、どう繋がってくるのかを考える。公民では、私達の身近にどんなことがあって、今日の社会が成り立っているのかを知り、いずれは大人になり、立派な公民となれるような導きをしていくこと。そのようなことを伝えるものだと私は思います。
- ⑥社会のこと。世の中のこと。
- ⑦偉人たちの考え。グラフを読み解き考える力。
- ⑧社会の知識だけでなく、考え方や勉強の仕方を伝える。
- ⑨現代の日本・世界はどのようにできたのか、また各地域での文化や特色を知ることで広い視野で物事を考えさせる。
- ⑩歴史的事件を背景から伝えることにより、物事を論理的に考えることの重要性を伝えるものだと思います。
- ⑪事件や出来事一つ一つにしっかりと理由があるということと、これら全てにしっかりとつながりがあるということを伝えたい。
- ⑫社会への一歩目だと伝えたい。公民・歴史・地理は根強く関わっていて、自分の将来に関わっていくものだと伝えたい。また暗記ではなく、理解し考え、自分の意見を持つことです。社会に正解はないと言いたいです。
- ⑬過去に起こった事柄を教えることで、現代社会をどのように見て、



将来のことに結びつけること。

⑭社会に出て生きていく力。

⑮社会という教科を通して自分たちが今後どのように生きていくかを考えてもらうことを伝えていくものだと思う。

⑯生徒が良き主権者としての教養を身に付けるための教育。

回答①～⑥のように、受講生が教科の内容を踏まえた回答をしていることから、教科書の内容を正しく伝えることを想定している様子が伺える。特に回答③の「ほとんどは今までにあった事実を伝える授業だと思う」という回答は、ある意味、社会科に対する一般的なイメージを代表する意見かも知れない。また回答④からは、歴史の知識が「教訓」となるものと位置づけられている様子が伺える。これなどは古典的な「歴史学」の理解とも言えるものかも知れない。しかし、社会科の教育課程において、教育内容として求められているものとはいささか異なるように感じる。その点では、回答⑤は、社会科改訂の趣旨でも述べられていることに近いものが見られる。そのような視点は見られるものの、社会科教育課程での「指導内容の示し方の改善」において示されている「社会的な見方・考え方」の概念、すなわち「時間、空間、相互関係などの視点に着目して事実等に関する知識を習得し、それらを比較、関連付けなどして考察・構想し、特色や意味、理論などの概念等に関する知識を身に付けるために必要となる」<sup>11)</sup> 考え方の視点や方法に通じる点は未だ明確に述べられてはいない。この点を教育していくことが授業の課題となるだろう。ただし、その為には史学概論の理解を促進させる必要がある。受講生に、歴史というものが単に「事実」を集成するものではなく、歴史家自身によって再構成されることを学習する機会を与えるべきである<sup>12)</sup>。しかし、史学科所属ではない学生には相当な困難を伴う可能性はあるだろう。この点に関して、「歴史総合」を意識した歴史学の方法論を学ぶカリキュラムを大学の教職課程に置くこ

とも想定していく必要があるだろう<sup>13)</sup>。

いっぽう回答⑦～⑬に見られるように、幅広い知識を踏まえた上で、社会で求められる技能や勉強方法、考え方ということも生徒に伝えることが社会科の役割であるということを理解しているようである。特に回答⑦のグラフの読み取りなど資料を活用する能力の涵養を意識した回答や、回答⑩の歴史の背景を考慮することや論理的に思考することを重視する回答、回答⑪や回答⑬のように繋がりを重視するという回答も見られた。このように教科の知識や技能を伝えていくという理解を超えて、社会というものと関連させて理解しているのである。また回答⑭や⑮にあるように、社会人として「生きていく力」を伝えることを社会科の目的として意識している様子が伺えるものもある。すなわち、歴史・地理・公民分野にまたがる幅広い知識と資料を読み取る技能を修得し、現実の社会に対する理解力を涵養することが社会科に求められるものであると認識しているのである。そして回答⑯に「生徒が良き主権者としての教養を身に付けるための教育」とあるように、生きる力を涵養する目的が、より良い社会人、公民、主権者を育成することであると理解している様子が見て取れる。このことは前述したように、社会科・地理歴史科学習の究極の目標である。

では、よりよい社会人、公民、主権者を育成するために、幅広い知識を修得させ、そこから思考力を涵養させることが社会科教育に求められるものであるとして、そのために社会科系教員に求められるものは何であろうか。

Q5. 社会科系の教員に最も必要な能力や技能は何だと思いますか。

- ①豊富な史学の知識、その他の雑学。生徒を引きつける話術。
- ②まず知識が必要であると思う。膨大な量の知識があれば、質問などには答えられる。だが知識が最も必要だとは思いますが、それだけでは

全く務まらないのは承知の上である。

- ③地理や歴史を分かりやすく伝える能力。
- ④教科書に書いてあることを、分かりやすく伝える能力。
- ⑤必要な能力は、良い意味で上手な嘘がつけることだと思います。これは歴史や地理に限るものです。公民では、より身近な存在を伝え、いつかは自分らにも通る道だと宣告できる能力です。正直、地理歴史では、実際に先生が体験するということは難しいです。なぜなら、歴史では人物紹介をしていても、その人に会ったこともないし、実物を見ているわけでもない。地理でも行った国もあるかも知れませんが、世界全てを調べることは難しく、ほぼ不可能です。それでも伝えるためには最もそれらしいことを堂々と言えだけの、自信と知識が必要である。公民は、身近に起きていることなので、よりリアルに伝えていることが大事になっていきます。
- ⑥頭の中にどれだけ知識を入れて、それを口で伝えられるかどうか。
- ⑦知識、コミュニケーション能力、指導力、話し方、忍耐力。
- ⑧話術、実体験、いろんな国や地域などの感覚、知識、忍耐力。
- ⑨分かりやすい工夫された授業を考えることができる。暗記ではなく、その単語の前後の出来事がきちんと説明できるようになる授業が出来る。
- ⑩考える力。
- ⑪生徒に対して適切な問題提起をしていく発想力だと思います。
- ⑫物事を関連させて教えること。生徒に考えさせること。社会の重要性をどう伝えるか。
- ⑬常に周りからの情報（ニュースや地域のこと）を気にすること。
- ⑭知識や人間性、物事を客観的に見ることが出来る力。
- ⑮生徒達にどのような興味関心を湧かせ、印象に残る授業を行うか。  
使用する資料は幅広く、オリジナル性豊かな授業展開力。

\* 無回答 1 名。

この質問に対し予想される回答としては、「知識の多さ」や「伝える力」であろう。回答①のような予想通りの回答はやはりあった。知識については、回答②に見られるように、知識だけではないことを前提としながらも、知識の必要性を感じている様子が伺える。このように回答①～⑦は、教師に求められる基本的な力として、知識に加えて伝える力や説明する力・話術など、コミュニケーション能力があると認識していることが判明する。この点について注意を払いたいのは、受講生が記す「伝える力」の中味である。教科内容を伝える力という意味のみであれば、授業におけるプレゼンテーション能力ということになるだろう。しかし、教師に求められるコミュニケーション能力とは、教科内容を伝える力だけではない筈である。生徒とのコミュニケーションという力こそ、教師に求められる能力である。そうでないと、先のQ3の回答で多くの受講生がアクティブラーニングの手法を理想としていたことや、Q4の回答において社会科で生徒に伝えることとして、技能や勉強方法・考え方と回答したことと合致しないことになる。その点について明確に回答したものがなかったことは、違和感を抱かざるを得ない。すなわち受講生が、これらの点を関連させて社会科教育とは何かということを思考していない様子も見取れるのである。もっとも、回答⑩における生徒への問題提起という回答に見られるような、生徒とのコミュニケーションを意識した回答は見られる。回答⑫にもその傾向が見られ、授業を通して社会的問題を生徒に意識させるコミュニケーションを取ろうとしている姿勢が見られる。そのためにこそ教師は、自らの考える力や情報を収集する力、物事を客観的に見る力を付けるべきである。

しかし、回答の中には「思考力」や「表現力」を涵養する力を教師が備えるべき力として認識しているものがあるのもまた事実である。回答⑨「きちんと説明できるようになる授業が出来る」とは、生徒自身が自ら説

明できるように教育することを想定した回答である。いっぽう回答⑩や⑫の「考える力」からは、思考力を涵養することを想定していることが判明する。また回答⑭「知識や人間性、物事を客観的に見ることが出来る力」からは、「知識」とともに、「人間性」や「判断力」を涵養することができる教育力を求めているとも想定されうる。

また回答⑬「常に周りからの情報（ニュースや地域のこと）を気にすること」や、回答⑮「使用する資料は幅広く、オリジナル性豊かな授業展開力」からは、社会的事象について見たり考えたりすることや、資料を活用することへの認識が認められる。社会的事象について考えることは、社会科の教科目標である「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す」<sup>14)</sup>ことに通じる課題である。いっぽう資料を活用することについては、「我が国の国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」<sup>15)</sup>ことに通じるものである。このような教科目標に合致する資質を教師に求めているのである。

以上のように、これらの回答からは、社会科・地理歴史科・公民科の教育目標である「公民としての資質・能力」を具体化した3つの柱である「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」<sup>16)</sup>に対する理解や、社会科の教科目標に対する理解をある程度は反映していることは確認できるのであるが、明確に記されていない。この点についての理解を深める必要がある。

では、そのために準備すべきことは何か。つまり、理想とする授業はどのようなものであり、社会科に求められるものとは何か、教師に求められる能力・技能は何かということを考えているのであれば、それに対して

自ら主体的に取り組むべき課題も考えることができる筈である。

そこで、在学中に社会科系教員になるためにどんな準備をしているのかを尋ねた。

Q6. 社会科系の教員になるためにどんな準備をするべきだと思いますか。

- ①生徒の何倍もの知識を頭に入れ、それを簡略化して伝えるための言語力をつけるための準備。
- ②全ての分野において知識を高めていかなければならない。
- ③知識を増やす。社会に詳しくなること。
- ④知識をつける。今まで書いていたノートを見て分かりやすい板書の書き方、資料を配るタイミングを考える。
- ⑤生徒に正しい知識を身につけてもらう為に、まず自分が正しい知識を身につけること。
- ⑥生徒が学ぶことへの予習だけでなく、導入などでも使える知識（雑学）など幅広く勉強することだと思います。
- ⑦勉強をし、知識をつける。そして社会科専門の教員の方に、どのような授業を行っているのかアドバイスを聞き入れ、それにもとづいた能力を身につける。
- ⑧たくさんの史料・資料を知ること。
- ⑨色々な場所を訪れる。日々のニュースを見て考える。
- ⑩社会科の知識を増やし、ニュースや新聞をこまめにチェックする。
- ⑪どうやって生徒に苦と思われずに教えられるか。豊富な史学の知識。
- ⑫自分の知識を伝えるため、生徒に興味をもってもらうための工夫や練習。
- ⑬今のうちに不安なところや、分からないところを補い、どのように伝えたら分かりやすいかを考えておく。

⑭誰に何を言われても答えられるだけの知識を身につけることと、伝える内容が頭に入るよう授業ができる能力、多少のユーモアができることを準備します。学校の先生たるもの、まずは知識が一番だと誰もが思うことだろうし、私もそう思います。ですが、伝え方が上手じゃないと、ただやっている授業になってしまいます。なるべく生徒と会話が生まれるような授業、先生・生徒が心から楽しいと思えるような授業作り。なので、ユーモアは磨いといて損はないかと思っています。私自身も、面白い先生は、授業も面白いと思うので、準備すべきだと思いました。

⑮自分には論理的に説明する能力が足りないと思うので、まずそこを補おうと思います。

\*無回答1名。

これまでの質問において、受講生は理想的な授業とはどのようなものか、また社会科に求められているものは何かについて回答して来た。それを踏まえて、受講生は大学時代に何を準備しているのか、あるいは準備しようとしているのかを質問したのである。したがって、前問までの回答を反映した回答が期待される箇所である。

しかし、多くの回答が「知識を付ける」ことに比重を置いたものになっている。授業としては、「知識を伝える」だけではないことは十分に理解している回答があったにもかかわらず、準備としては、まず知識を付けることが想定されている点は興味深い。その際に教科書に登場する「教科内容的知識」のみならず、回答⑥・⑪に見られるように、幅広い「知識（雑学）」や「豊富な史学の知識」（以下「史学的基礎知識」と記すことにする）の修得をめざしている点は授業においても受け止めるべき課題である。もちろん知識を付けることのみならず、生徒に興味を湧かせるような授業研究を行うことを挙げた回答⑫や、伝える力を磨こうとすることを挙げて

いる回答⑭・⑮も存在する。しかしながら受講生としては、現在の知識不足を認識し、授業を成立させるためにも、まず知識が必要であるとの認識に立っての回答であると思われる。この点に関して、戸田氏は、この質問に対する回答から、受講生自身が現在の自分に不足していると意識しているものが、社会科系教員に必要なものとして逆説的に示されることを指摘されている<sup>17)</sup>。

また、先のQ4において社会科が伝えるものとして、現実の社会において必要とされる「生きていく力」を育て、より良き主権者を育てることとの回答があった。そのような力を育む教員として「ニュースのチェック」という回答⑨・⑩は極めて妥当なものであると思われる。さらに回答⑮に見られるように、それを論理的に伝える力を在学中に磨く必要性を感じている受講生もいる。このような努力を通して、彼らは自己の理想とする授業に近づこうとする姿勢が見て取れるのである。これらの回答からは、これまで指摘してきた社会科・地理歴史科・公民科の教科の目標に対する理解がある程度見て取れる。

ところで、受講生自身は社会科の授業を通して、より良き社会人・公民・主権者としての教育を受けて「役に立った」のであろうか。それを確認したのが、次の質問である。

Q7. あなたが中学・高校で受けた社会科系の授業は役に立っていますか。役に立ったという人はその理由を、役に立っていないという人もその理由を書いて下さい。

(役に立った)

- ①衆議院や参議院など、国家の仕組みを学ぶことで、選挙権を与えられたとき、主体となって考えることが出来た。
- ②社会現象について、色々な考え方を聞くことができ、今の自分に役



立っている。

- ③私が役に立っていると特に思うのは高校公民です。政治・経済の授業で学んだことは日ごろのニュースを見る時にも理解の助けになっています。
- ④毎日少しでもニュースを見たりすることで、現在世の中で起きていることが少しでも把握できているから。
- ⑤理由は、旅行などに行った際に、観光地などを訪れた時に、あの時教わった内容は、このことだったのかと感動することがあるからです。また、大人になった時に、常識として会話が入って来て理解することができているからです。
- ⑥旅行などに行く時、旅行先の気候や宗教・文化などを学んでいた状態で行くこと出来る。
- ⑦旅行に行った時などに気候などが分かる。気象情報などで起こっていることの内容がある程度分かる。
- ⑧地理の知識などは普通に役に立っているし、日常的な知識として使うことができる。
- ⑨公民は現代社会の生活のために重要なもので、哲学は思想を学ぶことで、様々な考え方をできるようになり役に立っています。日本史・世界史である歴史学は一見役に立ってないと思われるが、現代の世界情勢を知るために必要な学問と思われる。
- ⑩自分は昔、レポートを作成するのが苦手だったが、日本史のレポートを作成するうちに要約する技術が向上した。
- ⑪授業やテレビなどで歴史に関係することが出てきた時。
- ⑫自分の将来の道しるべになった。  
(役に立っていない)
- ⑬先生が一人でベラベラ説明し、板書していた記憶しかない。正直、記憶には残っておらず、教職の授業で反転授業している方が頭に入っ

ている。

⑭板書を教えるだけの人が多かった。工夫がなく、つまらない授業だった。

\*無回答2名。

まず比率として見た場合、圧倒的に「役に立った」という回答になっていた。「役に立っていない」との回答も、教科の内容としてではなく、その授業形態に問題があったようである。

では「役に立った」と回答した受講生は、どのような点で役に立ったと感じたのだろうか。まず公民分野の知識が現実の社会に役立ったとする回答であり、回答①～④・⑨が相当する。次に地理分野は、旅行などの時の役に立つとか、その地域の気候や地誌的知識を知ることができるものである、回答⑤～⑧がこれに相当する。最後に歴史について言及しているものが回答⑨～⑪である。⑨は、歴史が今日の国際情勢の前提であって、それを知る基礎的理解を与えてくれる科目であると認識した回答である。それに対して回答⑩は、日本史を学習するなかで、歴史を調べてレポートするという学習が役に立ったとするものである。授業で修得する技能が役に立ったという認識である。回答⑪は、歴史を取り扱ったテレビ番組などを見た際に、「知っている」という認識が形成できるということであろう。回答⑫は具体的な記述がなく詳細は不明である。おそらく社会科の3分野全てを含めて、「生きる力」を育成する上で重要な役割を果たしたということだと思われる。

以上の3分野に対する認識から判断すると、とりわけ公民分野は「社会に出た時に役に立つ」というイメージが成立し易いことが分かる。しかし、現代の政治や経済を理解するための前提として、歴史や地理を学習することが役に立つというイメージは希薄のようである。例えば地域紛争や宗教対立などを考える時に、世界史を学んでいることが大いに役立つ筈である。

日本史も、現実に日本社会で暮らしていくなかで、日本社会の歴史的な前提を知ることは、現実の問題などを考察していく上で有効である筈である。しかしながら現実には、受講生の意識として歴史が役に立つ科目という意識は十分には形成されていないのである。要は、受講生にとって役に立つとは、「知識」を取得し、それを把持していることを指しているのである。学校教育で習ったことが、今も知識としてあり、それを何かの時に確認できることを「役に立った」という認識が形成されているに過ぎないのではないだろうか。極論すれば、応仁の乱が何年に起こったかなどを覚えることは、学校教育を離れた途端に忘れ去っても、現実の生活に支障はないだろう。そのような知識は正に「役に立たない知識」である。「役に立った」という回答の中に、現在もその知識を把持しており、それが確認されたことで「役立つ」と認識されているものが見られることから、かえって「役に立たない知識」を把持していることに価値を見出していることが確認されたようにも読み取れるのである。応仁の乱など一つの事件が、その後の社会をどのように変化させたのかを考える契機として社会科の授業が存在していれば、「役に立つ」という認識も異なった回答になっていた筈である。上記の回答からは、残念ながら社会科を「覚える科目」としてしか認識しておらず、「考える科目」としては理解していない様子が見て取れる。この点については、残念であるが学習指導要領に対する理解が不足している様子が確認された。大学における教職課程の教科教育において指導が求められる要素と言えるだろう。

最後に、「歴史総合」という科目について、どのように意識しているのかを確認した。

Q8. 2022年度の新入生から実施される高校の学習指導要領では、18世紀以降の世界と日本の動向を関連付けて学ぶ「歴史総合」を必修科目として新設することが盛り込まれているが、これについての意見を聞かせてくだ

さい。

- ①世界と日本との関わりを学ぶことが出来ると思うのでいいと思います。
- ②「社会的事象を歴史的な見方・考え方」を取り入れ、日本史と世界史を並行しながら学ばせることができるので、生徒達にとって、より歴史の流れが分かりやすくなるだろうと考えている。
- ③世界と日本を一気にやるのは頭がパンクしそうですが、ゆっくり進めて丁寧に授業を行えば「世界ではこういうことをしていて、日本ではこういうことをしている」という授業はおもしろそうだと思います。
- ④日本は外国の影響を受けて政治形態を変えるなどして来たため、変化の歴史を学ぶために賛成。
- ⑤「歴史総合」を必修科目として新設することに私は賛成です。理由は、18世紀以降の日本は諸国の外交政策と関係して、日本も条約を結んでいるため、政策・条約の因果関係を分かりやすくするために重要だと思います。
- ⑥今何が起きているのか、過去の過ちから何を学ぶのかを考えるいい機会になると考える。
- ⑦この科目は、歴史的イベントを世界・日本と多角的に見ることができ、より思考力を高めることができます。よって私は賛成です。
- ⑧現在もそうだが、日本だけを見るよりも、世界の中の日本として見た方が、日本だけ見ていては見えないものもあると思うので、良いと思う。
- ⑨18世紀以降の産業革命や世界大戦などを学ぶことは、とても大事だと思うから良いと思う。
- ⑩私は賛成です。理由としては、これからの時代、よりグローバルな

社会になって行くと思い、そこで日本のことだけを学ぶのも良いが、世界の動向を学ばないわけにもいかなくなります。そうやっていずれ社会に入っていく人間を育てるためにも、若いうちから物事を様々な観点から見ていける能力を身につけると良いと思うからです。世界との関連を学べば、日本の歴史への見方も、私たちが勉強してきた時よりも変わって見える筈です。そうして学ぶことは、将来社会に出た時に必ず役に立つと思います。逆にそういう能力がないと厳しいと思うので、これは是非、若いうちから身につけていくべきだと思います。なので私はこの意見に賛成です。

- ⑪近代史の知識があまり無かったので、近代史を中心にやるという文科省の考えには賛成だ。ただのイメージだが、明治～昭和ごろは速足でやっている授業が多い気がするのも一つの要因だと思う。授業も最後の方になり、時間数も限られるのもあって、あまり深く学べていないのかも知れない。
- ⑫私は世界と日本を分けなくても良いと思う。なぜなら年号が日本と世界でごちゃごちゃになってしまうから。
- ⑬今に直結する内容が多くあると思うので、詳しくやる必要がある。別に置くことで、より専門的に学べる。
- ⑭範囲が膨大になってしまうこと、そして日本史の免許しか持っていない先生はどうするのか。

\* 無回答2名

賛成意見には、回答⑫のように消極的な賛成もあるが、回答①～⑩に見られるように、これからのグローバルな社会を見据えて、世界の中の日本を学習するために必要であるという理解に基づいていることが分かる。これは正に「歴史総合」の目標である「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立

ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」<sup>18)</sup>を育成することに通じるものであると判断される。

いっぽう反対意見を述べているものは2名いた。ただし反対意見の回答⑬は、日本史必修を求めているようなものではなく、世界史も日本史も詳細に学ぶことを推奨している意見である。両者を詳細に学ぶなかで、両者を有機的に結びつけることは意識しなくともできるとの認識なのであろう。そのようなことができる者も少なくはないだろうが、両者を有機的に結びつけるためには意識して学ぶ必要がある者も多い。賛成意見の多くは、それ故に総合的に取り上げる授業展開に期待を寄せたものと理解できる。なお、もう1つの反対意見の回答⑭は、「歴史総合」という科目および社会科系の教員免許制度に対する理解不足が背景にあると思われる。

このような理解に受講生が到達している背景としては、現実の社会におけるグローバル化が進んでおり、そのような社会に生きる若者として当然の認識を反映しているのであろう。また、現在の大学生世代が、「世界の中の日本」という観点で教育を受ける機会が多くなっていることも、要因の一つと考えられる。この様な傾向が見られるのは、上記のような社会的な背景があると考えられる。このように現実の社会の変化や、それを受けた教育の変化に対応した世代にとって、今次の改革で新設された「歴史総合」は受け入れやすいものとなっているのである。

教職課程の種々の授業内容が直接的に影響を与えた可能性が最も高いと推測されるが、大学入学までの教育や、大学での教職課程以外の教育が果たした役割も無視できない。アンケート対象となった学生の所属学部・学科にも要因が求められる可能性がある。アンケート対象となった受講生は、経済学部、国際学部にも所属する学生であり、これらの学生が普段学ぶ授業内容からも、同様の観点が涵養されている可能性がある<sup>19)</sup>。そうであるなら、一般大学における教職課程という開放制教員養成の理念が結実してい

ると言えるだろう。

以上のように、社会科系教科の教職科目を受講する学生を対象にアンケート調査を実施したのであるが、そこに見られる受講生の意識を整理しておきたい。

まずそもそもなぜ教職を志望したのかを質問した。その結果、アンケート回答者16名中10名（63%）は、過去における良い教師との出会いが教職をめざした理由であったことが確認できた。いっぽう逆の体験を理由としている回答もあり、良いにしろ悪いにしろ、学校での教師の指導が重要な要因となっていることが理解できる。そのなかで社会科系教科を選択した理由は、おおよそ次の3つのカテゴリーに分類される。まず影響を受けた教師の指導が好きで、社会科系教科の教職科目を履修した者。ここからも、やはり教師の指導が影響を与えていることが確認できる。次に、そもそも社会科系教科が得意であるとか好きであった者。最後は、社会科の教科としての意義を踏まえて選択している者。自らの教育経験を踏まえて、歴史あるいは社会科の教科内容に興味・関心を抱き、さらにその教育的意義を理解し、自らの進路選択の要因としているのである。

では、彼らはどのような授業を理想としているのであろうか。半数の者が、教師が一方的に知識を伝達するのではなく、双方向的な授業、生徒主体の授業を理想とする回答を寄せている。受講生の多くはアクティブラーニングの手法を理想としており、またその授業内容において知識を伝授することと、現代社会との繋がりを意識して、社会で必要な知識や技能を修得させることなどを理想している様子が伺えた。そのような授業を行うために彼らは、知識の必要性を感じている様子が伺える。また、伝える力や説明する力・話術など、コミュニケーション能力の必要性も感じている様子である。ところが受講生が現在準備している事柄としては、「知識を付ける」ことに比重を置いたものになっている。授業としては、「知識を伝える」だけではないことは十分に理解している回答であったにもかかわらず

ず、現在の知識不足を認識し、まず知識をつけることに注力している様子が伺える。また、「社会科が役に立ったか」という質問に対しては、その回答からは「生きていく力」を育て、より良き主権者を育てるために役に立ったとの認識があった。そのためにも「ニュースのチェック」という準備をしているらしい。

最後に「歴史総合」に対する賛否を問うたところ、圧倒的に賛成であり、「世界の中の日本」という観点で歴史を教えることに賛意を示した点は、グローバル化が進展している時代を反映した教育を経験して来た受講生の意識をよく示している。

### 3. 学習結果から見た学生の学修成果

#### 3.1. 学習目標の確認のための課題

社会科教育の目標とする資質・能力の柱である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を生徒に獲得させるために、教員自身が上記の資質・能力を獲得するための努力が求められる。この点については、梶田穀一氏は「優れた教師が備えるべき資質・条件」として、3点を指摘されている。すなわち、①「教育的情熱・真剣さ」、②「教育的力量を身に付ける」、③「総合的人間力を身に付ける」の3点である<sup>20)</sup>。教職課程において受講生は、とりわけ「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を生徒に獲得させるための「教育的力量を身に付ける」ことが課題となる。先のアンケートの結果を見ると、その「教育的力量」として、受講生が意識していることが「知識の習得」であり、その知識を伝達する「コミュニケーション能力の涵養」であった。ただし、教師のとしての「コミュニケーション能力」というのは、前述したように教育での様々な場面における生徒との意志の伝達であるが、アンケートからは授業内容における知識の伝達という「プレゼンテーション能力」を想定しているようである。もちろん、プレゼン



テーション能力を向上させることは重要であり、教職課程において取り組むべき課題である。さらには児童・生徒に「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を獲得させるための教育手法などを学ぶことが、「教育的力量を身に付ける」ことになるのであり、教職課程における課題となるものである。

そこで、教職課程の教科専門科目である日本史概論において、筆者がその取り組みとして実施していることを、まず紹介しておきたい。

## 1) 「知識」

### ① 予習

毎回の授業で使用するレジュメに、歴史用語20語分の空欄を作成しておく。それを前の週の授業で事前に配付し、別紙に空欄補充すべき歴史用語と、その簡単な解説を書かせて授業前日までに提出させる。提出されたものは添削して授業開始時に返却する。

### ② 授業

毎回の小テストの間に、受講生の背中に予習して来た歴史用語がそれぞれ記してあるA6サイズの紙を貼る。テスト終了後に受講者は数グループに分かれて直列に並び、自分の前の受講生の背中にある歴史用語を説明し、前に並ぶ受講生にその歴史用語を解答させるゲームを実施する。

### ③ 復習・小テスト

授業の翌週には、歴史用語を小テストで確認する。小テストは10点満点で実施し、5点分は課題の歴史用語（教科内容的知識）を簡潔に説明させる問題を出題し、残り5点分は十干十二支や、旧国名、前近代の度量衡の単位など、「史学的基礎知識」を問う問題を出題している。

以上の学習を通して、受講生自身が知識を習得することと、その知識を伝えるためのプレゼンテーション能力を高めることで、生徒に「知識」を

獲得させる教育的力量を身に付けることを目指している。

## 2) 「技能」「思考力・判断力・表現力等」

### ①予習

毎回の授業範囲において、受講生自身が教員となった時に、どのような授業展開を行うのかを予習として「ワークシート」に執筆させる。このワークシートには、自分が授業を実施することを想定して、「設問（学習課題）」と「解答例（学習のまとめ）」を執筆させ、その学習課題から解答へと導くための「指導上の工夫」を執筆させるものである。主に学習指導要領に基づき、「知識」のみならず「技能」を修得させるような指導上の工夫や、「思考力・判断力・表現力等」を身に付けるような指導が展開されているのかを評価し添削して返却する。その際に、毎回10点満点で採点し、翌週に返却している。

### ②授業

毎回の授業において、1ないし2名を指名し自身のワークシートの内容を発表させる。その指導内容について、受講生を4名程度のグループに分けて討論させた上で、発表者と質疑応答を行う。

### ③復習

ワークシートの添削を受けて、「授業プランニングシート」を作成させる。これはワークシートにおいて想定した工夫を、添削を踏まえてさらに修正し執筆させるものである。50分間の授業を想定し、その学習過程を「生徒の学習活動」と「教師の支援」に分けて授業展開を執筆させるものであり、指導案の略案が記せる形式のフォーマットを配付して記述させている。こちらも10点満点で採点し添削の後に返却している。

以上の学習を通して、指導者として生徒に「技能」をどのように修得させるのか、「思考力」を涵養させるために何を実施し、その過程でどのような「判断力」を修得させ、どのように「表現」するべきかを常に考えな

から歴史の学習を行わせようとするものである。

梶田叡一氏が指摘されている「優れた教師が備えるべき資質・条件」としての3点のうち、③「総合的人間力を身に付ける」については授業内で具体的な取り組みはないが、上記の授業内容によって、社会科教育の目標とする資質・能力の柱のうち「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」を獲得させるための指導を常に想定して学習することで、梶田氏指摘の②「教育的力量を身に付ける」ことを実現したい。またこのような課題を毎回取り組むことを通して、①「教育的情熱・真剣さ」について受講生に身につけさせることにも繋がる可能性はある。

### 3. 2. 学修成果

次に、2019年度前期の「日本史概論Ⅰ」の結果に基づき、受講生の学習行動を学修成果から考察してみたい。なお、その観察対象者は11名である。先の意識調査におけるアンケート回答者は16名であったが、学期の途中で履修を「放棄」した者もあり、「評価対象者」は11名となった。

まず「知識」であるが、意識調査からも分かるように、受講生自身も「知識の習得」に重きをおいていることから、その取り組みには積極的になるものである。その「知識の習得」については、前述したように予習として20個分の歴史用語を執筆させて提出しているもの（以下「予習プリント」と表現する）と、その知識の定着を測る「小テスト」の結果から確認できる。まず「予習プリント」を毎回20点満点で評価した結果から、受講生の行動を示すものが次の表1である。

この表1からは、受講生の取得ポイントの平均が19.5ポイントであり、基本的に毎回ほぼ間違いわずに空欄補充を提出している。最も低い者でも平均18.9ポイントであり、受講生の学習として取り組みやすい課題であったことが見えて来る。歴史の学習として、教科書などを読み、そこに現れる歴史用語の意味を調べ記憶するという学習は、受講生がこれまで学習して

表1 予習プリント成績（評価対象者）

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	平均
1	20	19	20	20	20	20	20	20	—	20	20	20	19	20	19.8
2	20	19	20	20	20	20	20	20	19	20	20	20	20	20	19.9
3	20	19	20	20	20	20	20	20	20	20	19	20	20	20	19.9
4	20	19	20	19	20	20	19	20	20	20	19	19	20	20	19.6
⑤	20	16	20	—	20	20	20	20	18	19	17	20	20	20	19.2
6	20	20	20	19	19	20	19	17	20	20	19	20	—	20	19.5
⑦	19	19	20	18	—	19	19	20	19	18	18	20	18	19	18.9
8	19	20	20	20	20	20	19	20	20	20	19	19	18	19	19.5
⑨	19	20	20	16	20	19	18	20	—	20	18	19	—	—	19.0
⑩	19	20	20	18	20	19	19	20	19	19	—	—	17	—	19.1
11	20	20	20	20	20	18	20	20	20	20	20	20	20	20	19.9
平均	19.6	19.2	20.0	19.0	19.9	19.5	19.4	19.7	19.4	19.6	18.9	19.7	19.1	19.8	19.5

（注）2019年度前期「日本史概論Ⅰ」の受講生のうち、成績評価の対象となった11名について、20点満点でその結果を示したものである。授業は15回実施し、予習プリントの提出は14回行った。なお受講生の番号1～11のうち、丸数字になっている者は「不可」の評価となったものである。

来た方法論に最も合致しており、取り組みやすい学習課題となっているのではないかと推測する。また同時に平均以下の者が「不可」となっていることから、このような学習が他の学習の結果にも影響を与える「基礎的な学習」と推測することも可能だろう。

では、このような学習を通して、彼らは「知識」を習得したのだろうか。その点を「小テスト」の結果を示す表2から見たい。

この「小テスト」のうち5点分は前回の授業で実施した歴史用語の説明であるが、残り5点分は「史学的基礎知識」を問うものを出题した。例えば律令制度に関する単元であれば、「大宝律令」や「班田収授法」などの歴史用語や、「刑部親王」などの人名などを前半5点分出題し、後半5点分は地積の単位（町・段・畝・歩）や、十干十二支、旧国制における国名や七道などを解答させたりした。予習で取り組んだ「知識」が定着したのかということであるならば、「小テスト」のうち前半の5点分のみを対象とした結果から分析するべきであろうが、「記憶」の把持率を検証している訳ではなく、歴史の「知識」を取得する学習活動の成果を測定すること

表2 小テスト成績（評価対象者）

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	平均
1	0	2	5	2	2	2	2	2	2	6	4	8	2	0	2.8
2	1	3	5	7	4	6	8	4	3	7	6	9	7	2	5.1
3	2	5	8	9	8	9	10	7	8	10	7	9	7	4	7.4
4	0	1	欠	4	1	5	6	3	7	6	4	9	5	0	3.9
⑤	3	1	4	欠	0	0	7	3	5	3	5	8	5	3	3.6
6	2	3	6	6	3	6	3	6	5	6	7	9	欠	3	5.0
⑦	0	0	5	欠	0	2	0	1	0	2	2	1	2	0	1.2
8	4	5	6	10	7	9	8	7	8	10	7	8	7	4	7.1
⑨	1	1	6	0	1	1	1	1	欠	3	5	5	欠	欠	2.3
⑩	1	2	0	1	1	2	1	1	0	1	2	欠	5	欠	1.4
11	2	6	3	2	3	8	6	5	欠	8	7	7	7	4	5.2
平均	1.5	2.6	4.8	4.6	2.7	4.5	4.7	3.6	4.2	5.6	5.1	7.3	5.2	2.2	4.1

（注）2019年度前期「日本史概論Ⅰ」の受講生のうち、成績評価の対象となった11名について、10点満点でその結果を示したものである。授業は15回実施し、小テストは14回行った。なお受講生の番号1～11のうち、丸数字になっている者は「不可」の評価となったものである。

を目指して実施している「小テスト」であり、予習や授業で学習した「教科内容的知識」に関連させ、「史学的基礎知識」を習得する姿勢が身に付いたかを検証することこそ、この学修成果調査の意義があると考えた。

先の表1の結果と比較すると、明らかに表2の結果は見劣りがするものである。受講生は、予習として「調べて来る」ということには容易に取り組めるが、その「知識」を完全に記憶し、簡潔な文章で表現することに対する取り組みに対して、十分に対応しきれていない様子が見て取れる。平均点を見ると、徐々に成績は上昇している。これは「教科内容的知識」を習得することはできるようになって来たことと、「史学的基礎知識」への取り組みが不十分ながらも受動的な学習を克服して、自ら関連事項を学ぶ姿勢に歩み出したことが主要因であった。教師として歴史を教えるために必要な「史学的基礎知識」を積極的に身に付ける姿勢を形成していくことも、教職課程の授業での課題であると考えられる。

次に「技能」や「思考力・判断力・表現力等」を身に付けるような指導についての学習が進展したのかを検証したい。この点については、先に記

したように、予習として「ワークシート」をさせたのだが、その結果が次の表3である。

「ワークシート」では、「生徒の気づき」を促すための「教師の働きかけ」が記されているのかをまず確認した。教師が地図や年表、史料、グラフや表などの資料を提示する「働きかけ」を行い、それらの資史料に基づき「生徒の気づき」を促す指導を想定できているのかを確認したのである。例えば、「江戸時代の大名配置図を示し、そこから幕府との親疎による区分から大名配置の傾向を読み取らせる」などである。さらには、白地図に、親藩・譜代・外様の配置状況を色分けさせるような作業を行わせるなどの指導もありうる。これらの過程を経て、「生徒の気づき」が形成されたのならば、その「気づき」から、歴史に対する「思考」へと導く「教師の支援」がなされているのかを次に確認した。この「思考」から「判断」そして「表現」へと至る過程を、授業の中でどのように展開するのかを明確に記されていることを評価基準として採点した。

この「ワークシート」の解答では、グループによる「話し合い」によっ

表3 予習ワークシート成績（評価対象者）

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	平均
1	8	9	8	10	9	9	9	9	—	9	8	10	5	—	8.6
2	3	3	5	5	2	7	6	6	4	4	5	3	6	—	4.5
3	5	4	9	10	10	9	9	10	10	9	9	10	9	8	8.6
4	2	1	0	2	2	3	4	3	3	2	1	0	2	4	2.1
⑤	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.0
6	7	3	5	4	6	7	10	6	6	6	3	—	—	5	5.7
⑦	6	2	3	—	2	2	5	3	3	1	1	0	—	0	2.3
8	5	4	6	7	8	6	9	9	10	6	8	8	9	7	7.3
⑨	1	1	0	—	0	4	1	1	—	—	2	0	—	—	1.1
⑩	5	5	3	4	4	2	3	4	1	3	—	1	—	—	3.2
11	2	6	5	3	5	5	6	10	—	5	7	—	1	5	5.0
平均	4.4	3.5	4.4	5.6	4.8	5.4	6.2	6.1	5.3	5.0	4.9	4.0	5.3	4.8	4.5

(注) 2019年度前期「日本史概論Ⅰ」の受講生のうち、成績評価の対象となった11名について、10点満点でその結果を示したものである。授業は15回実施し、ワークシートは14回提出させた。なお受講生の番号1～11のうち、丸数字になっている者は「不可」の評価となったものである。

て「思考」し、グループとしての「判断」（結論）を導き、それを発表させるという授業展開を想定したものが最も多かった。またその際の工夫として、いきなりグループで「話し合う」と、フリーライダーになる者がいることを想定して、まず個人で「思考」して、その「判断」を記述するワークシートを配付した上で、個人の結論に基づきグループで討議するように配慮したものもあった。これらは先の意識調査アンケートのQ3の回答において、教師が一方向的に知識を伝達するのではなく、双方向的な授業、生徒主体の授業を理想とする回答が見られた傾向と合致している。そこでは「写真や絵・地図などから、たくさんの情報を与えられるような授業」（Q3・③）という「技能」の修得を意識した回答や、「なぜこれが起きたのか、起きた後の結果は？など、起承転結のように流れを教えることができるような授業」（Q3・⑤）という「思考力」の涵養を意識した回答が見られた。また、「生徒から自主的に意見を出してもらえようような授業」（Q3・⑥）とか、「話し合いの時間を作る」（Q3・⑦）、「双方向から意見や考えが飛ぶ（飛び交う）授業」（Q3・⑧）を理想としている回答や、「自分で調べ学習したいと思える授業」、「自ら学習できるような授業」（Q3・⑩）という「主体的・対話的で深い学び」の実現へと導きたいと考えている様子が確認できた。そのため、自分なりに、どのような授業でこの単元を学ばせるのかを記述してくる「ワークシート」の提出率は比較的高いものがあった。このような形で歴史の授業を想定して学習することに対しては、受講生は積極的に行動することが見て取れた。

ただし、留意すべき課題も見出せた。グループでの「話し合い」という授業展開が典型的な解答として見られるのは、現在の学校教育においてこのような授業が頻繁に行われているために、受講生も自らの経験に基づき、授業展開として想定したものと思われる。しかし教師の十分な「働きかけ」がないにもかかわらず「話し合い」という形式に当てはめる解答も散見された。また抽象的なテーマで話し合わせても、十分な成果が得られる

ものではなく、何に基づいて、何を議論するのかを具体的に提示していくべきだと言うことを授業経験がない受講生に気づかせることも教職課程の授業での課題であると考えられる。

この「ワークシート」が添削され返却されると、その添削内容などを踏まえて、復習としての「プランニングシート」を提出することになる。「ワークシート」では、学習内容に合わせて、自分自身が考えた指導法などを執筆するのだが、この「プランニングシート」は、自分の想定した授業展開を実行可能なプランとして執筆させるものである。添削内容を反映させることが困難に感じるのか、提出しない者が多かった。その結果は表4の通りである。

自らが生徒として授業を受けた経験に基づき、授業方法を想定して来ることは比較的容易に取り組めたのだろうが、そこに指導の「ねらい」や「目的」を明確にして来ることを要求され、さらに50分間の授業として実施可能なプランに落とし込んでくるという作業は、受講生には相当な負担になるのだろう、表4からも分かるように提出者が極端に少なかった。先

表4 復習プランニングシート成績（評価対象者）

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	平均
1	8	8	5	5	未	未	未	未	未	未	7	9	未	未	7.0
2	未	未	未	6	未	6	8	6	7	7	7	未	未	未	6.7
3	未	7	未	7	7	8	8	9	10	8	5	8	9	未	7.8
4	0	1	0	0	3	3	2	2	1	2	2	3	3	2	1.7
⑤	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	
6	6	1	5	4	5	2	7	8	6	3	3	未	未	7	4.8
⑦	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	
8	7	9	7	7	7	7	10	8	9	未	8	9	未	未	8.0
⑨	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	
⑩	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	
11	6	7	1	4	7	5	0	5	未	6	5	10	未	未	5.1
平均	5.4	5.5	3.6	4.7	5.8	5.2	5.8	6.3	6.6	5.2	5.3	7.8	6.0	4.5	5.9

(注) 2019年度前期「日本史概論Ⅰ」の受講生のうち、成績評価の対象となった11名について、10点満点でその結果を示したものである。授業は15回実施し、プランニングシートは14回提出させた。なお受講生の番号1～11のうち、丸数字になっている者は「不可」の評価となったものである。



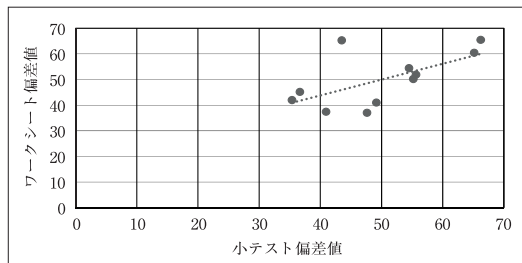
の意識調査から、半数の者が、教師が一方的に知識を伝達するのではなく、双方向的な授業、生徒主体の授業を理想とする回答を寄せている。またその際の教育手法としてアクティブラーニングの手法を理想としていた。そのような指導法を想定することは容易なのだが、それを実現可能な指導計画にまとめる行動に導くことには困難を要している。未だ現実的ではないものの理想とするような授業を受講生が想定している点は大切に育みながら、それを実行可能な計画へと練り上げる企画力・思考力を涵養することも教職課程の授業での課題であると考えられる。

ところで、「知識」の取得と、「技能」や「思考力・判断力・表現力等」を涵養する指導法の修得には、相関関係が見出せるのだろうか。その点を確認したものが表5と図1である。評価対象者とした11名について、「小テスト」と「ワークシート」について平均得点および偏差値を算出したものである。取得した点数の平均値（平均得点）ではバラつきが大きいため、

表5 小テストとワークシートの相関

	小テスト		ワークシート	
	平均得点	偏差値	平均得点	偏差値
1	2.8	43.49	8.6	65.24
2	5.1	55.22	4.5	50.17
3	7.4	66.23	8.6	65.46
4	3.9	49.15	2.1	40.98
⑤	3.6	47.62	1.0	36.99
6	5.0	54.50	5.7	54.37
⑦	1.2	35.37	2.3	41.96
8	7.1	65.17	7.3	60.40
⑨	2.3	40.94	1.1	37.41
⑩	1.4	36.68	3.2	45.12
11	5.2	55.65	5.0	51.89
標準偏差	2.01		2.685	

図1 小テストとワークシートの相関関係



(注) 2019年度前期「日本史概論Ⅰ」の受講生のうち、成績評価の対象となった11名について調査したものである。なお受講生の番号1～11のうち、丸数字になっている者は「不可」の評価となったものである。

偏差値を算出した。標準偏差は、「小テスト」が2.01、「ワークシート」は2.685であった。図1は、横軸を小テストの偏差値、縦軸をワークシートの偏差値として、評価対象者11名の成績分布を表示したものである。

この結果から、「小テスト」と「ワークシート」の成績には相関関係が見出されるものと考えられる。「小テスト」の成績が低い者は「ワークシート」の成績も低いということは、「知識」が不十分な者が授業展開を想定したとしても、十分なものにならないという、当然の帰結の現れである。ただし、受講生No.1のように、「小テスト」が偏差値43.49と低いが、「ワークシート」の偏差値が65.24と最上位層に属する者がいる。ごく稀な事例ではあるが、授業アイデアが豊富で、魅力的なプランを想定する受講生もいることは事実である。しかしながら大部分の受講生の指導としては、まずは受講生自身も意識している通り、「知識」の取得をめざすべきである。その上で、その「知識」の有効な活用をめざすような指導法を研究するように導くことが課題と考えられる。

#### 4. まとめ

以上の受講生の意識と学修成果を踏まえて、教職課程の歴史科目としては、今後の授業において、どのようなことが求められるのであろうか。特に「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」という柱を形成するための指導に対する理解を深めるために、日本史概論において取り組むべき授業改善の課題として、以下の点が想定される。

- ①まず、日本史の「知識」を学ばせる教育が求められる。受講生自身が最も必要性を意識している事柄であり、他の資質・能力の基礎となるものである。また直接的に生徒に学習させるものであるから、これを無視することはできないだろう。そのためか、彼らが取り組みやすい学習課題

である「用語調べ」という学習行動は成果が確認でき、教育法としては成功を収めていると判断できる。しかし、幅広い「史学的基礎知識」を修得させることや、その知識をどのように定着させるのが今後の課題であることも判明した。小テストで知識の定着を図るというオーソドックスな方針だけでは不十分である。授業中にピア学習などを行わせ、相手に説明することで知識の定着を図ることも試みたい。

- ②知識を集積させることは当然であるが、その知識を伝える力を同時に修得させる工夫も考えていくべきである。「伝える力」とは、生徒の前での「話術」だけではない。「知識を伝える」よりも「知識の習得法を伝える」力が想定されるべきである。その第一歩として、資史料の取り扱いなどを学習することで、資史料を活用して知識を伝えることができるようにしていくべきである。それゆえ資史料に関する教育が求められる。具体的には、授業の予習・復習において、各単元に対する自らの指導法を執筆させ、それを添削指導することを実施しているが、その単元で学習するテーマを生徒に理解させるためには、資史料を取り扱うことを教育すべきである。また、この教育法に対する学習行動を見ると、授業中に発表する必要性から予習には積極的に取り組んでいるが、添削を受けて授業計画を作成する復習は積極的に取り組んでおらず、成績からも、その学修成果は十分ではないことが分かる。たしかに実現可能な授業を想定することは、資史料を活用したり、生徒が活動したりする学習法を想定することよりも数段難しいことは想像に難くない。この点を克服することが今後の課題である。この点は、教科指導法の授業と連携していくことが課題となるだろう。まずは現在行っている添削指導の徹底を試みて行きたい。
- ③歴史分野もまた「考える」科目であることの理解を促進するべきである。歴史的事実や資史料を活用すること、学術的な研究を参照すること、さらには地理的条件なども加味して考察することで、生徒の「思考力・判

断力・表現力等」を涵養する指導ができるように教育する必要がある。この点は、「知識」に偏重しがちな受講生の意識を変革させる必要が特に求められる箇所である。そのためには資史料に基づき、歴史的に考察させるように指導する力を養成することが課題である。先の②で述べた教育法において、「思考力・判断力・表現力等」を涵養する指導を想定するように教育しているが、その結果は前述した通り不十分なものである。特に「思考力」を涵養することには課題が残る。受講生は、何らかの指導法を想定するという学習行動は取るのだが、そこに歴史的な思考力を涵養することを想定することは反映されていない。この点を促進することが課題となる。新書レベルでも良いから歴史研究書を読み、歴史家の思考を学習させ、授業でどのように活用するのかをレポートさせることを試みたい。

以上の課題を踏まえ、教職課程科目である日本史概論の授業改善を行うことで「考える歴史」を指導する力を涵養したい。そのことが、「主体的に社会の形成に参加」することができる公民を育成することのできる指導者の育成を可能にするものと考えている。

## 注

- 1) 戸田靖久「アンケート調査から見た社会科系教職科目受講生の意識と社会科教育法の課題」(『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』23号、2015年)
- 2) 中央教育審議会答申。文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説・社会編』(東洋館出版社、2018年、以下『中学校学習指導要領』と記す)「第1章総説・第2節社会科改訂の趣旨及び要点」p.11参照。同『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説・地理歴史編』(東洋館出版社、2019年、以下『高等学校学習指導要領』と記す)「第1章総説・第2節地理歴史科改訂の趣旨及び要点」p.10～11参照。
- 3) 受講生の回答は基本的に記述されたものをそのまま引用した。ただし固有名詞などは削除し、明らかな誤字は訂正した。また回答した学生が特定できないように、回答番号は同じ学生のものにならないように、質問項目ごとに

変更している。

- 4) 戸田前掲書 p.177～178
- 5) 『中学校学習指導要領』「第1章総説・第2節社会科改訂の趣旨及び要点」p.5～10参照。同『高等学校学習指導要領』「第1章総説・第2節地理歴史科改訂の趣旨及び要点」p.6～10参照。
- 6) 『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』参照。文部科学省ホームページ＞政策・審議会＞審議会情報＞中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別添資料」[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_3\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_3_1.pdf)（最終アクセス日2019年6月8日）参照。
- 7) 『中学校学習指導要領』p.3および、『高等学校学習指導要領』p.3参照。
- 8) 筆者の授業については、拙稿「遊び」を取り入れた日本史授業」（『敬愛大学研究論集』第92号、2018年）を参照されたい。
- 9) 『中学校学習指導要領』p.84参照。
- 10) 『中学校学習指導要領』p.14および、『高等学校学習指導要領』p.14参照。
- 11) 『中学校学習指導要領』p.13参照。
- 12) このような考え方を示したものとして、例えばE.H.カー著（清水幾多郎訳）『歴史とは何か』（岩波新書、1962年）がある。
- 13) このような大学のカリキュラム見直しについては、西村嘉高「新しい高等学校学習指導要領をめぐる」（『歴史学研究科』979号、2019年）が、大阪大学の取り組みを紹介し、その必要性を指摘している。
- 14) 『中学校学習指導要領』p.23および、『高等学校学習指導要領』p.36参照。
- 15) 『中学校学習指導要領』p.25および、『高等学校学習指導要領』p.138～139参照。
- 16) 『中学校学習指導要領』p.11および、『高等学校学習指導要領』p.10参照。
- 17) 戸田前掲書 p.185
- 18) 『高等学校学習指導要領』p.124参照。
- 19) 受講生の所属は、経済学部15名、国際学部4名である。経済学部生は、所属学科未定の1年生1名を除き14名が経済学科で、そのうち13名が国際経済関係や現代日本の経済問題・社会問題を学ぶ現代経済コースに所属している。また国際学部4名のうち3名がこども教育学科、1名が国際学科で、この国際学科の学生は、日本・国際理解専攻の学生である。このような所属学科等での通常の授業が影響を与えている可能性は十分に考えられる。
- 20) 平成17年3月23日の中央教育審議会義務教育特別部会における配布資料。[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/attach/1382351.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/attach/1382351.htm)（最終アクセス日2019年8月3日）参照。